

翻刻『八束穂集』春・冬（上）

井 上 隆 明

例言。延宝の地方俳書、そして宗因・西鶴・随流・玄札・蝶々子・調和・似春を網羅するほどの本書の特色については、拙稿「桂葉の『八束穂集』（『国文学』昭和43年6月号）に、編者小伝とともに紹介済みである。春夏秋冬の部立て全四冊のうち、管見に入った春冬二冊だけ翻刻したい。

編者は出羽山本郡野代港（現・能代市）の鎮守八幡大神宮護国山般若寺・金松山蓮萊寺の別当だった修験僧大光院桂葉。本姓が平賀氏（『代邑聞見録』の社寺記録及び「八束穂集」跋）で、『俳諧師手鑑』列伝などの諸書にある平田氏は誤謬だ。序北村季吟、跋の少蝶庵里鶯は桂葉息だった。縦一九・六、横一三・八センチ。「春」は六三、「冬」は四六丁。題簽剝落、匡郭ナシ。内題「八束穂集」柱刻「八束」で、刊記は「延宝八_{庚申}年五月吉日 武村三郎兵衛板行」で大坂である。但し底本は元表紙でなく、仮題簽として、いま「八束穂集発句 春（または冬）」として、あらたに改装貼付している。秋田県平鹿郡増田町高橋友藏氏蔵。

本文の句読点ナシ等はすべて原文のママだが、序・目録題

・作者并句引・跋は改行を無視したし、漢字はおおむね現代表記法による略字に改めた。學を学にするたぐいだ。春一オの松柳堂燕石文は、後年の書き入れたが、念のため書き出した。

田子の浦に立出海面を詠むるに心乃とかに見得たりし魚翁か便釣竿のいとまおしかられ鳧風雅いつよりも猶不審き事ながら猶いにしゑ乃ことミ志のバれ給ふこそ夕朝の詠と号スものならし

元禄十五年

松柳堂

午九月二日

燕石 一オ

役の小角ハ言乃葉の秋を五色の岩屋にのこひし玉ひ聖宝僧正はなかめの春を古今集におとしとめ玉へるこれみな法乃力こふを出たして哥の林乃大木屋根引にしたる物なるらし其ふみあけし跡をとめて行尊僧正乃雪さへふかきみやまを尋ね覚助親王の（「一ウ」）麓乃霧を分玉へる行迹乃山かけくらき松風をきき道昭乃古屋の軒乃月をなかめ教範乃雲乃うへをゆき良宝乃むかしのあとをも

つらね玉ひしすへて彼峰乃かけ出のつゐてに和哥のうら道を過りてにせしたくひあけていふへからす扱このわさこと乃葉はかの和哥のうら道のちまた（「ニオ」にそわかれ出てしなこそかへれ一もと乃ゆへなるに晚翠堂乃桂葉秋田の門人乃稻蔓をあつむるつゐてに諸国の作者のおち穂をも拾ひ入て四巻巻部となして八束穂と名つく是かのあたてるおはん神乃其いなたねをとりもちて天の邑君を定め玉ひたりは（「ニウ」）しなひし事乃もにともつきて国家乃繁昌をいのらんとならしか乃うはそくかをこなふ道にみることなりといへと仏陀乃すらもわか神国乃ミとわさもいひもてゆけハ二つならされへなり桂葉かはいはいは予かし藤井乃みなまたの末をうけたねよりて此序をこへり予も末葉の（「三オ」）さかへをよろこふあまりにあへて辞せすして延宝八年二月廿五日にかきくはへ侍し 洛下北村季吟

〔書入れ〕 文政十丁亥三月十五日 雄勝郡関口邑

奥山吉左エ門

（井上注・関口邑は現・秋田県湯沢市） 「三ッ

八束穂集発句題 春 上中下

元日 試筆 若戎 年徳神付元方 門松付傍松傍竹傍 蓬菜付にし
 肴穂長掛鯛 鏡餅付雑煮大服 屠蘇酒着衣始付節小袖 祝月付太郎月
 蔵開 弓始 諷物付松拍子 船乗初 読初付会始 売初 初夢（「四
 オ」） 唱星 四方拝 立春付若水 水様 玉毬打 羽子突 化粧
 文 水祝 初芝居 綱引 人日付福わかし 白馬節 子日 卯杖
 左義長 御忌 水解 春雪付幾雲 霞 梅 柳 鶯 雲雀 雉
 子 帰鴈 燕 春鷹 蛙（「四ウ」） 蝶 薪能 涅槃会 菫菜

土筆 蕨 野老 種漬 付種漬 返田 茶摘付新茶 花 付特花 火燈花 月
 花 散花 桜 付家桜 山桜 彼岸桜 桜 施桜 龍谷桜 伊勢桜 普賢桜 江
 風 散花 桜 戸桜 塩蔵桜 糸桜 耕桜 霧谷 西行桜 墨染桜 楊貴桜 大桜
 桜 上巳 付蕨餅 沙干 鳥合 離遊 山吹 躑躅 藤 梨花 海棠 椿花 辛
 夷花（「五オ」） 沈丁花 小米花 木蓮花 春草 御身拭 順
 峯入 春月 永日 春夜 春雨 桜鯛 柳鮓 猫妻恋 鹿角落
 春駒 春時鳥付雀巢 雀子 紙鳶 雑春 三月尽（「五ウ」）（六オ空
 白）

八束穂集発句春之上

元日

筆やかふる哥書を腰もと老の春
 歳旦ハ一天四海なん万句
 哥口にひらくか春や天下皆
 床わきや宗匠役の花の春
 我らか旬煤やはらふてと朝の春
 三つ物や京へつくしに関東佐
 京しやもの只ハとをさし句毎に春
 猶そ来ん祇園清水の花の春
 立られたりりと杜頭の花の春
 こきませて扇や朱骨花の春
 味噌つきより七十五日也花の春
 めくり来るや諸木一見の花の春
 二度立や智恵才寛乃花の春

秋田城下梅津氏 季吟
 同山方氏 忠雄
 同野代住 昌治
 京住 善林
 羽州仙北住 友治
 京住 一加
 京住 季吟
 秋田野代住 少蝶
 京住 友静
 江戸住 似春
 秋田野代住 親房
 同住宮殿氏 通忠

大手口ひらくるや花城の春

りん一つ先さいたんや年の花

嬉しさに今朝やおこめく花の春

谷金衣御使者とあつく宿に春

四十九になり侍し春

五十雀や我に一とせ花の兄

九十一になり侍しに

をれか春や小町にへまた八つ妹

千代乃坂木履て越ん老か春

鳩の杖つくりと立や老の春

年たけてなりけりく春に又

老の波春やたんで五十鈴河

いかにねておきやかり小法しけさの春

佐保姫へ出羽乃御ならし国の春

道し有世や文武別江戸乃春

火焼さへ矢倉隙なり御代へ春

世へ扇国乃かなめや江戸の春

枝国や内々御意を江戸乃春

京と江戸やけさ咲分乃花の春

御代も春桜かさかん大目付

なんとして算盤なとてハ江戸の春

秋田城下大鶴氏

仙室

一七〇

秋田黒沢氏

元重

羽州山形住

紫

北村氏

湖春

秋田野代住

桂葉

勢州松女

祖母

季

吟母

秋田野代住

三耀

大坂

梅翁

秋田野代住

親光

大坂

秋田城下

秋田

秋也

同野代住

安秋

京住

招正

羽州仙北住

重旨

仙北角ノたて

外

仙北角ノたて

利

大坂高岡氏

湖春

成

林

一八〇

一七ウ

図に見えたり日本第一世界の春

君か春や千代にや千代にさされ衆

吸て琥珀春万歳を呼せたり

銘乃物や国つく家つく代々の春

おさまりけり武蔵のの春大盃

鏡ときも手を置ん世そ君か春

すめる世や目出たふ滄浪水の春

商山や松風はかり御代の春

飛石や羽乃生る迄御代の春

金か歩か御手ににきりし国の春

御代や春無事は貴人下万民

何も家門年をむかへて繁昌す

天に地に通力つよし神乃春

飾繩やけにゆつり葉乃神の春

世界よかれ十方旦那寺乃春

あら玉をふくむや春乃口号

天の戸や一間ひらけて四方の春

年に行急き候ほとに春

年頭ようゐかうふりして今の京

高宮乃山もかすみてけさ物まう

京住

正貞

奥州南部住

欣

京住

眠松

秋田野代住

宗栄

大坂袖岡氏

政之

京原田氏

正盛

桂

立葉

北村氏

正立

秋田大たて住

梅雪

京

如風

同

可全

仙北湯沢住

重旨

勢州度会氏

全彦

同世木氏

定光

勢州松坂住

存

野代住

竹霧

勢州山田住

武珎

秋田野代小玉氏

成吉

桂

葉

大坂木原氏

宗円

一九〇

一八ウ

一九ウ

立や春されハ袴も襦さあもん
年男己や春殿乃御用人

節米ハ何よりもつく安ふ候

ひろき世そ年取はつす人もなし

朝薫や春にひかれて時鳥

雨ふりける元日に

春ハけふ先はなを見る木履哉

門松にけさやおさかり藤の花

霞つく峯乃先達やけさの春

霞敷やけさ東君の八重疊

立やすしこんな事なら百とせも

秋田城下梅津氏忠雄殿家の千句満座追加に

試筆

書初やされ句にひらく花の春

賀乃哥をはひまいらせて吉書哉

書初や言葉乃花の句ひ墨

書初や今貰之か言葉の末

試る筆や千とせ乃声有絵

世ハ万年一句かきぬらん筆始

百貫乃案の字も哉試筆の句

京 眠松

野代住 盛之

江州磯野氏 得友

勢州山田住 高平

大坂 由延

京折井氏 重次

野代住 浄光

□吹氏 春丸

野代住 少蝶

梅 翁

桂 葉

秋田梅津氏 水

野代中井氏 淡

三 耀

秋田鈴木氏 南朝

京 友静

京住 行休

野代小玉氏 成吉

京望月氏 千春

試筆にや万の宝かそへ哥

書初や長閑き古語を種として

祝ひ哥かうもあらふか筆始

書初乃硯の海や和哥乃浦

書初や詩哥誹諧三つ乃春

書初やけふから三百六十字

書初や御代もあらゆる文字の数

書初や延宝七年正月日

文台やけさ書初乃え方棚

文台乃ふた明ほのの吉書哉

筆の笠ぬくも吉書の礼儀哉

筆始すあへめてたく候かしく

書初や君か代永ふ候へく候

書初乃文巻川かすすり水

書初の文字や真名鶴島乃跡

書初や先以て無事宿の春

弓よ鞠よ包丁馬乃年始

今朝立し春や之友か馬の年

年と日やはせかるたの馬の年

若戎

仙北よこて住 貞治

野代住 清吉

野代住 万慶

秋田大たて住 成芳

仙北角たて 政次

三鷹息 半十

秋田大たて住 玄智

野代住伊東 政古

同氏 長徳

同字野氏 万太

羽州清沢 清厚

勢州山田住 信房

秋田順行寺 不

秋田住 貞必

大坂住 助音

野代住 宗房

秋田 南朝

秋田梅津氏 淡水

風鈴軒

長に褒美御合点なり若戎
 安穩に立や腰の句和哥夷
 すてに夷千代やゆつりて若大黒
 ミるや鏡うく尤しや若戎
 年かくす人なとかめそ若戎
 えかほこそ猶おかしけれ若戎
 年 徳 神 付 え方
 年徳をけきこそせたり老の春
 人間の水ハみなミをえ方哉
 門 松 付飾松 飾竹 飾繩
 もとハさて誰か川柳そ門の松
 立砂やかされる松乃ちとせ山
 門松や写し絵にミる土佐かゝり
 立て祝ふ松や千とせを不老門
 かさり松管家に徳をあらハせり
 かさる世や来はる／＼乃都草
 門松や万葉集のいにしへの義
 歳旦の哥やこころの松かさり
 年頭のふり分髪やかさり松
 かさり松や針乃始の御よろこひ
 かさり町八千代乃松原通り哉

秋田城下 遅 牛
 京長谷川氏 興 政
 京 栄 也
 京井律氏 静 之
 堺辻氏 宗 満
 秋田城下 茂 昭
 野代利生(院脱カ) 為 心
 秋田大福氏 仙 室
 野代小玉氏 重 吉
 秋田 宜 秋
 秋田大たて 友 静
 野代生 千代 都
 同小玉氏 成 辰
 秋田栗酒氏 重 友
 羽州山形 時 入
 秋田関口氏 友 英
 野代生 直 勝
 南 信 朝

巳と午のあひより青し飾松
 飾りけり竹乃そのふの末葉迄
 飾竹去年とやいはんことし生
 逸物に鞭かことし乃飾竹
 そよ／＼ろおい此君そかさり竹
 冬籠り今ハはるへししめ飾
 秋田衆をことふきて
 かさりわらや秋田のミ有難波舟
 蓬 菜 付にし有 穂長 掛鯛
 蓬菜や亀山と乃御代の春
 蓬菜乃かさりやむへも鬼野老
 金山乃盛をことふきて
 金山乃口より春や出蓬菜
 にし肴実や吾妻のはてしまて
 ひさつきが穂長引敷小殿原
 掛て祝て魚扁に周の代々乃春
 掛鯛に波乃しめゆふ穂長哉
 刈田村田秋田に祝ふ穂長哉
 鏡 餅付雑煮 大服
 日の本やよろしく股に鑑餅
 うら白や餅の鏡の雪と波

秋田久和村氏 雅 茂
 秋田 時 入
 秋田大阿仁住 少 蝶
 京幸氏 俊 満
 仙北角たて住 若 松
 眞 春
 大坂住 小 柴
 野代生 親 光
 勢州山田住 嘉 国
 大坂住 林 安
 野代生 塵 外
 京幸氏 若 松
 野代はせ川氏 好 秀
 京大村氏 可 全
 桂 葉
 野代生 少 蝶
 可 全
 一三四ウ
 一四オ

君か代や民も雑煮を朝嘉例

大ふくや花香もふかき井戸茶碗

くすしのや祝ふ大服茶調散

大ふく乃茶船や祝ふ難波へん

屠蘇酒

万八やとそ祝ふ身乃年の数

千とせの坂越てやとそにえひとこな

言乃外の楽ミやとそに榮啓期

とそ乃酒や興に乗して身をハ下戸

とそ珍重くり言を乃ミそ祝ひ月

着衣 始付節小袖

老にけらし若ものたてな着衣始

節小袖に妻やさゝれ石たゝミ

したてたや節小袖より此一句

春立とぬふはかりにや節小袖

世のおほえ花やかなれや節小袖

祝 月付太郎月

小殿原や大殿の世を祝ひ月

風満橋を夢に見てひらきの会に

橋ハ夢も吉なり祝ひ月

心はせハ松の葉にあり祝ひ月

大坂木原氏

秋田喜草氏

同大たて住

大坂高岡氏

成

大坂住

野代住

同小玉氏

秋田重

野代仙

重

柳谷氏

直

秋田森氏

同津田氏

嘉

野代一明院

同飯村氏

湖

同宮原氏

通

円

弘

治

林

貞

能

吉

室

吉

吉

成

吉

成

慶

友

雲

忠

吟

満

季

俊

数の子や二万乃里人祝ひ月

一年の花の兄御よ太郎月

蔵開

米柳なひく世しるし蔵ひらき

御祝儀を俵数はかりそ蔵開

祝ふ心鑑そしるらん蔵ひらき

弓始

文王も武を忘れぬや弓始

諷 初付松相子

うたひ初あら面白乃春辺やな

春毎乃次第めてたしうたひ初

唄初や目出たき年の矢卓賀茂

大坊主髪置したり松柏子

船乗初

乗初は一万八千艘とかや

読初

よミ初幸甚くそもくゝん

会 初ニ

初会や文台このむ宿の梅

売初

売初や買人これを正月す

奥州南部住

仙北湯沢住

家

野代

通

濃州鈴木氏

秋田森氏

政

秋田城下

同(正へ野代住)山方氏

同小嶋氏

同小野氏

京

ト

野代住

三

羽州酒田住

隨

湖

秋田中野氏

三

時

直

忠

澄

成

不

久

全

以

守

京

ト

耀

三

吟

春

望

一七オ

一六オ

一六オ

一六オ

初夢

初夢のあふた時ぬけたから笠

唱星

馬の年や明て唱ふる星芦毛

四方拜

あら玉や面向不背四方拜
めぐりくる今年や四方はい乃狛

立 春付若水

五日立春に

立春ま五日飛脚のあさ霞

大坂にて

若水よてんにへのほれ馳堀

和哥水はいつミ式部かなかれ哉

三日立春なるに

若水や豊斟ぬかむ神の春

氷 様

なら乃世のおほん様かこほり山
氷の様蒼海牛馬の道有けり

いそちにミち待るとし、

今朝そしる四十九年の非のためし

玉 毬 打

孫そ愛手老をいとはてこらへ玉
ふりくや声打そふる松の門

野代大洲氏

綱 充 一七ウ

桂 葉

野代柳谷氏

直 治 葉

友 静 一八オ

筑前森氏

種 成 札

江戸高橋氏

桂 葉

京

友 静 風 一八ウ

桂 葉

勢州山田氏

季 吟 珎

梅かかや先うつるらん玉毬打

羽 子 突

つくはねの棟より落る小家哉

やり羽子や友とする姫ひとりふたり

化 粧 文

化粧文や文字のなき世を飜繩

買にきて人にかたるな化粧文

けさうふミひくく風乃穴かしく

水 祝

人心ぬれにそぬれし水あミせ

妹やたのむ身さへなかと水祝

思ひつつぬれはや人乃水あミせ

従者聲や面目すく水あミせ

初 芝 居

花の外につきぬるかねや初芝居

おもしろに狂ひ候そ初芝居

綱 引

子よ孫よいさ綱ひこよやしハ子よ

神の綱もつよかれとひく君か春

人 日 付 わ か し

つむ袖や露にぬれもの姫若な

努婢を制するを見て

友 静

仙北松井氏

重 一八九オ

江戸住

風

仙

奥州南部住

焉

加州松住

煙

若州高橋住

德

秋田

慶 一九ウ

秋田比内住

充

野代住

能

京望月氏

之

野代住

言

秋田久和村氏

雲

尾州なこや住

風 二〇オ

少 蝶

風前の燈なれや春の雪

厨子やあらぬ春やむかし乃雪仏

雪仏春や本来無面目

消残る雪や半身達磨仏

餅雪をかふるや消間日の鼠

蠅蝸か会津乃山の雪なたれ

霞

風の手に山を引出す霞哉

鬼か城おほふ霞やかくれミの

松のみとりつゝむ霞や菓子袋

霞はれミとりをくくる菓子屋哉

吉野山腰の霞や葛はかま

腰きりの霞はやま乃羽をり哉

残る雪や霞のきぬののりたまり

目もはる乃花にかすミや錦歩障

富士の雪や霞の海の浪かしら

風の手にかすミやミかく鎌か浦

八束穂葉発句春之中

梅

焼塩か火とす梅に春の霜

内本宗英興行に

秋田

仙室 蝶「二三オ」

仙北よこて

江州安達氏

秋田加納氏

大坂

宗

円

秋田(正へ野代住)山方氏

同武士氏

奥州南郡住

種

信州高遠住

秋田小野氏

紀州

秋田

同加藤氏

桂

同ウ

秋田兼(正へ菊)谷氏

閑信

見えました梅の立枝か路地の内

梅の花や匂ふ香妒の一重口

梅津氏淡水殿興行に

二つもなく三つもなかもや一重梅

立花に

鶯の声をやそへん梅のしん

梅に鶯の絵に

二月の雪ころもに落ぬ梅の風

梅見月や入を落花と存し候

氏中にて興行に

根を一つ枝咲分て八重の梅

梅津氏の御方にて興行に

竹にそふ梅へ万年こよミ哉

誓願寺春日の神前の紅梅を

春日卓眺炉もゆ也梅の色

一口と両吟に

香包ミ匂ふ紅梅竹皮そや

万木の花の司かりんし梅

朝霞なひくや宿帚りんし梅

鍵梅の高名やつく発句帳

梅かえハ千本やりか小かち山

鍵梅のちるや落あし花軍

江正立

桂葉「二五ウ」

湖春

肥後住 季吟

忠雄

桂葉

季吟

湖春

成芳

好信

「二六ウ」

北南枝やわかりて座論の梅
 ちる花を見て通世か梅法師
 たちえより雪ひらめくや豊後梅
 文このむ木ミの苔やち急袋
 短冊も好文木とハ付られたり
 雪と香や風吹分てこほれ梅
 飛梅乃句ひや雲の袖香炉
 飛梅の花や達者な哥乃作
 飛句いかに梅に先立花もなし
 飛梅にはね乃はへてや鳥井筋
 追善に
 散をしそおもふや花の兄者人
 有かた乃名ひらきに
 目出たしや名に香に付て花の兄
 見る人の目の仏もやあミた梅
 いく度も見帰り仏あミた梅
 火ともすやけんけいの作あミた梅
 あミた梅へにはん極楽の花見哉
 梅津氏忠雄殿千句興行に巻頭にとて
 巻の上に立枝や見もの梅の花
 柳

同泉氏 勝 由
 秋田根岸氏 秀
 野代 方
 直 吉
 秋田小嶋氏 久
 勢州山田氏 幸
 貞 信
 同竹内氏 三
 秋田木内氏 真
 一入子女 長
 筑前住 桂
 種 成
 仙北淺舞住 一 栄
 角廻安藤氏 貞 春
 野代住 盛 之
 秋田山方氏 泰 賢
 野代住 政 古
 秋田上山氏 光 定
 桂 葉
 〱二八〇

膏藥か来てハ句にねる柳陰
 西行の心の関や柳かけ
 出茶屋もか清水流るる柳陰
 大坂真清水万句に
 仏像か千こに目作る柳陰
 柳こそ花の滝見の観世音
 南無観世をんな姿や柳髪
 木の間もる月にハ目はり柳哉
 気力なき柳や風の入ちから
 ひさもんの神木なれや米柳
 餅花の種やさそひて米柳
 知行とり乃音やいと絶ぬ米柳
 糸柳つむくハ風の手しろ哉
 風の手や柳の糸をよるもひく
 柳に鳥のとまりたる絵に
 烏羽玉のよれつもつるるや糸柳
 長々し髪ハ一条柳原
 青柳や咲花もしの長かもし
 もつれ嶋にて
 柳髪やミたれつよれつもつれ嶋
 花の露や柳の髪乃美男石

野代住 俊 能
 秋田梅津氏 不 真
 勢州 三 保
 羽州山形住 桂 葉
 讃州住 未 覚
 正 範
 秋田青木氏 遅 牛
 京山本氏 少 〱二八〇
 仙北瀬谷氏 光 魚
 野代 俊 天
 同小玉氏 重 能
 三 吉
 奥州田名部 政 杏
 江 季 吟
 野代 昌 札
 治
 筑前飯塚住 長 平
 野代清水氏 政 満

柳髪香をとむるか水けふり
西大寺にて

児わけし西の大寺乃柳髪

鶯

家に千句興行に題をさくりて

鶯や一字の題に千々の春

千句独吟乃巻頭

鶯や今を春辺に哥の吟

鶯や梅ある宿をかそへ哥

鶯や花の都を哥まくら

鶯乃哥もやせとのせんさい集

鶯ハ哥の中山そたち哉

もろ声に鳴鶯や哥論義

鶯と蛙やうた乃吟かはり

人來とハ餌さしの事か鳥のこゑ

忠雄殿興行に

千尋ある絵にやうくひすまんねん

植る竹や先鶯をした心

梅に竹にいつれもうくひすミ所

梅ハとひとまりはうくひすもり哉

梅か枝にひかる源氏が金衣鳥

かはらしな梅に鶯こなた達

勢州 巻 女

桂 葉 二九ウ

秋田梅津氏 忠 雄

角たて安藤氏 蝶々子 利

信州高遠住 貞 房

海津住 幾 久 一三〇オ

野代 清 吉

角館住 重 道

秋田小嶋氏 盛 以

秋田 宜 秋

秋田 三 葉

野代住 充 幹 一三〇ウ

江 戸 宗 栄

湖 和 春

やさかたなうくひすかたや梅の介

鶯やむめよき花にはれけ経

経をよむ鳥のすミかや竹林寺

鶯乃かい子やいはく爾前経

うくひす声きくや地唄雲林院

しり声をはねて鳴音やうくひすん

正定興行に

鶯よいかな笛にもいなかへし

鶯の口さミせんか婆餅焦

三谷何かしかもとにて

鶯や花を三谷乃相屋とり

鶯の声や妙法れんけ谷

線香か火とす花に匂ひ鳥

鶯のはつ音おもへハ伽羅もなし

雲 雀

なんそれそしかるや似たり雲雀笛

吹やいかにうはの空なる雲雀笛

雲雀にて鳴声笛に似たりけり

雉 子

野辺ハ雉けんしよかくれの鳴音哉

けいろうの山のひゝきか雉のこゑ

勢州中村氏 清 敷

秋 田 一 若

勢州喜皇氏 貞 幸

仙北松井氏 友 之

南部住石川氏 清 次 一三二オ

秋田影瀬氏 春 松

南部大田氏 季 吟

幽 閑

江戸 梅 友

野代 正 光

越前三國住 清 信 一三一ウ

桂 葉

秋田住 宜 秋

肥後八代住 久 綱

桂 葉

比内住 南 朝

家 充 一三三オ

帰鴈

春の夜のよミハあやなしの文字
春かすミすりやならへるの文字

一つかひおりある鴈や八文字

とふ鴈のもしハかすミのまきり哉

光陰乃矢文かそらを帰鴈

花に帰る雁字に付よふしん紙

鴈陣や破れて帰る春の空

白鴈やつはさに残る春の雪

鴈ハ花にはなれきつたる心かな

とまれかし北ハ金神かへる鴈

尹長興行に

北は帰鴈みなミハ青し何もなし

燕

をのか果やかけてわら屋も燕子楼

梅津忠雄殿泊鴈野乃旅宿へ参りて

花そ根に鳥ハゆかけに山帰り

蛙

波そ鼓蛙乃笛をはやし物

蛙とのあら田のもし乃御哥や

哥よミてかへるといへる本文あり

角館木本氏

師 如 貞 英

野代住

少 蝶 充

同大綱氏

勢州

網 幸 誰

秋田一郎氏

風 子

秋田梅津氏

蝶々 水 重 禧

江州海津住

信 三 禧

桂 葉

三 禧

桂 葉

三 禧

秋田山方氏

秋田小龍崎

勢州

意 蝶 幸

蛙はふ蒼路ハ哥乃むしろ哉

哥よむやまた口わきも青かへる

なかくて居るや一文不知乃尼かへる

軍このむ蛙や水にあふれもの

あま乃命ひろひかへる乃軍かな

伊勢武者の軍すかたや赤かへる

蝶

から桃にとまれる蝶や胡椒帛

おハ山の花にこてふや陰の舞

舞あそふ身ハゆふてふなそたち哉

花にまふてふハ海棠くたり哉

散花につれて小てふも乱舞哉

見とれてハ目もつれ舞のこてふ哉

めぐりあふめ蝶男蝶や舞車

植木屋乃花にとまるハ小てふ哉

るねふるや花にこてふ乃醉心

驚舞か弥右か門辺にとふ胡蝶

新能

かはれるや伽羅を薪の能衣装

なら柴や薪の能にかしは崎

甲案や七つ時より薪の能

山田荒木田氏

定 清

秋田武士氏

比内住

嘉 用 胤

秋田

京中西氏

及 甫 葉

桂 葉

野代住宇野氏

親 房

秋田加納氏

松 嵐

秋田きくや

三國住

大たて住

角館住山本氏

野代住

野代住

横手住

尾州

大坂有馬氏

一 清

切くへて今そたき木の能々ニ

涅槃会

別てやしるもしらぬもほとけ機
涅槃会やそれ前仏へすてに舎利

ひかし山にあそひて

けふ涅槃其沙汰おめて遊山哉

過去のしや現在にけふ涅槃像

頭北面西天ちくのあはれ哉

かりの世に仏もうたゝねはん哉

絵の具もや山土かふるねはん像

わかれてハあふ事かたし石仏

しやりとてハつらきほとけの別哉

脇をまけ枕になくねはん哉

けふといへハ沙羅窓中のなげき哉

ねはん絵や洎なからに書とゝむ

なんと玉をつらぬくすゝや御入滅

ねはん会御法の花の三月尽

菫

御室焼か嵯峨野に咲る壹菫

土の筆有に付て乃すミれ哉

不真ぬしの山庄にて興行に

野遊ハされ句まじりの菫哉

桂葉

秋田大鐘氏

可悦
葉「三五オ

湖

秋田川村氏

尚友

柳川氏

親以

野代

正立

勢州小林氏

政利
文「三五ウ

野代

光油

伊丹氏

竹忠

勢州山田氏

清房

伊丹上島氏

治重
葉「三六オ

同十三才

桂葉

土筆

小法師もつむや寺地の筆つ花

土筆つむ手に露やちらし書

巻筆か蛛乃糸ひくつくくし

灰書もするか焼野のつくくし

通玄院殿追善興行に

数積むや頓写乃手向筆つ花

蕨

山姫の蕨指ハ是か福わらひ

ぬをてふに手枕さするわらひ哉

蕨手やひえあせにきる雪の中

蕨手に数そふ露やちからこふ

雪汁や蕨手あらふ手洗水

手を出す蕨や露をたもんでふ

野老

野をあてにほらはやはらん雪の下

掘出すやあなおそろしの鬼野老

山口にはれるところやつくり鬚

あらへせて御覧候へひけところ

種漬付種時

堺衆にあひ侍りて

硯水ハ哥乃種かし所哉

秋田舟木氏

臥雲

角館小嶋氏

貞好

仙北浅舞住

栄吉

仙北松井氏

友治

桂葉

今津住

宜秋

勝信

教賀住

正次

三国住

正勝

角館住

桂葉

野代はせ川氏

好好秀

秋田白土氏

不可

南部黒沢氏

景治

盛岡住太田氏

幽閑

去年聞し鹿乃音まくや萩の種

返田

新田嶋にて

あせ返す句や新田の春の作

茶摘 付新茶

懐旧に

淡と消し昔を思ふ新茶哉

はや摘や名乗もあへす三百斤

花付月前花 法花 花軍

忠雄家乃千句第三に

孕ミ句や枝にしらぬ花の下

詩や哥ハ心の花乃あや錦

此ころ発句にしたき花見哉

人こころ腋に成にけり花の発句

花に一句先案しても御論んせよ

花よ香よ見る物聞物哥の種

有御方より発句御所望に

かしこまりこまり候そ花乃作

作や此花にこもり句初瀬山

桂哉興行に

哥書にこそ何尋けん四方の花

目にハ花口にハ哥を栄花哉

尾州 雀巢

江戸 蝶々子

金沢住 由 桂 歌 葉 「三八オ

秋田梅津氏 淡 水 胡

仙北茂木氏 知 春

金沢浅野氏 湖 歌

秋田浅井氏 由 心

同一部氏 初 誰 「三八ウ

宮腰住 俊 平

野代住 一 能

江州八幡住 桂 葉 信

花売よ是いか程乃哥の題

見せハ氣をさんせん坊そひえの山

花にはたしうたれて暮す山路哉

上野へとめくるや花見車坂

下り坂に嶮岨覚ゆる花見哉

花に目かくれて帰らぬ人もなし

腰錢ハ茶屋かころの花見哉

盲目もしるやころ乃花盛

三線よさてハ座頭も花見哉

花見にもゆかて只にや病あかり

いへは名もやさしくなりぬ花見風

花見風うつりにけりな板の物

色見えてうつろふ物や花見風

言の葉の花見風や哥書の紙魚

花見にまかりて

真さかり風もうらミぬ花見哉

山道ハ花に日くらし通哉

弁当もひらかぬ内か花見哉

花に来て見とるゝ人や羽ぬけ鳥

さぬき衆になるゝも花のえんさ哉

老らくや花にうき世の物わすれ

津輕山本氏 友 金

同野代住 安 正 「三九オ

湯沢佐々木氏 公 網

江戸住 忠 虎

正 立

季 吟

羽州山形住 索 索

秋田山方氏 貞 直

勢州松坂住 季 吟

秋田川村氏 三 好 「三九ウ

同大たて住 秀 秋

同藤田住 定 治

桂 葉 重

湖 春

秋 松 風

山形住 吟 「四〇オ

秋田兼谷氏(正ハ菊谷氏) 閑 信

仙北住源 治 貞

角ノたて住 貞 好

誰か有御前に候花乃番

十文字や川花垣や結まはし

唄ひよるや然るに一枝の花の底

たたれぬやしひりきれねと花の底

香へくんし人も群集す花の底

居すくミに死すとも可也花の底

下ひえや身をへ思はず花のもと

京に人有りか花見のひかし山

花見衆やあかぬ別の鳥乃声

春の日ハ長し短し花乃時

京の花見安楽国に生るゝかと

上京の比道すから

花の顔にあるや木の目の塩見坂

はせよし野こや両面の花衣

花衣きてこそふりハよし野様

うつり香にせんたく惜し花衣

人こゝろ花にありく鞠の庭

身にそはぬ心や花の影法し

心とめさうき世もあらし花の下

飼料や心乃駒に花のたね

等持院にて

野代小玉氏

成

秋田武田氏

正

同今村氏

伊丹住

三

勢州

名護屋住

秋田加納氏

遊

南部住

正

松

桂

蝶々

伊丹住

竹

秋田竹内氏

光

松坂住

三

酒田住

吉

之

信

重

昭

友

保

立

加

嵐

葉

子

油

政

禮

風

保

三

三

三

伊丹住上嶋氏

龜

丸

「四〇ウ

「四一オ

「四一ウ

世盛や花に残して十三代

三寸の舌や言葉乃花のしん

雨後めくや物いふやうなはなの口

花の口にそける露やうかひ水

雨中花といふことを

春雨に来露やふくむ花の口

花や千々種に一味のあめか下

雨や露ふたりしてとく花の紐

花や紐時乃めいほく世の聞へ

花の紐とく手間賃か雨のあし

花に雨たのむや他力本願寺

月前花といふ事を

此外に何かあらふな月と花

月と花はむる時も哉哥もかな

月よ花よ扱人間にあそふ事

月花のあはれしる身に下戸もなし

月花やすなはち阿の羽かひ山

三つ物新か乃人く興行に

自今以後や猶月の友花の友

憂世なり月に村雲花に愚句

十雪の間に

湖

仙北横手住

勝

山形住

未

秋田みなとノ住

秋

長

秋田青木氏

遅

同片岡氏

奇

仙北住松井氏

友

角館住

政

山形住

松

角館住木本氏

師

英

秋田正(野代住山方氏

同栗栖氏

春

美

覚

入

友

勢州山田住

己

松坂住

三

秋田住

好

松

季

吟

桂

葉

「四二ウ

「四二ウ

「四二ウ

「四二ウ

「四二ウ

見よ花ハ八重九重に十の雪

下陰に酔さめ寒し花の雪

目に見えぬさは姫や花の雪女

花そふるあの松こそハ雪ひらよ

法事乃庭にまかりて

似我蜂ハ自家偈の声か法の花

木によつてとくや御法乃花のひも

貞室追悼に

死をなけく泪や法の花の雨

天王寺にて

花に人や蠅ほとたかり法の庭

法乃花何を種とてうき御堂

作礼而去にこりとえむや法の花

一枝なふなふ花たへなふお僧なふ

古寺乃花といふ事を

花乃時や寂めついらぬ鐘の声

折花はいかにまかへて酒機嫌

短冊ハ間はらかけ也花いくさ

陰につほミ陽にひらくや花軍

見ぬ人や弓断強敵花いくさ

花 滝

青蓮院御門主御自筆の桜の絵を給りて当座

湖 春

一 以

秋田住 桂 哉 一四三才

越前新保住 秀 白

秋田幸氏 一 若

紀州 一 入

保 友 一四三才

宮腰住 閏 之

海津住 桂 友

得 友

市部住 重 賀

野代小玉氏 成 吉

小浜川越氏 今 武 一四四才

仙北角間川 丁 葉

拝領やいたゝきに落る花乃滝

目の中の仏や花の滝不動

こいすねや乃ほりて峯の花の滝

待 花

題に待花や日数をかそへ哥

御利生よ花待やとに雨の宮

待花に句や／＼おもふ誹諸師

雨たりや待花にうつ羯鼓楼

火 燈 花

哥人や三十字火ともす花の窓

火ともすやさなから花のえた灯炉

木の耳ハ花の火ともすほくち哉

火をともし花に鬱氣をほうし哉

花も火をともしや狐稻荷山

かきたてよ火ともす花に哥連哥

花も爪に火をともしかやおしミ咲

春雨ハ火ともす花にあふら哉

火ともすや花まつ人乃胸の内

落 花

花そちるおもへハ此鐘うらめしや

しもたこそ鐘に科なし花の寺

京間杉氏 治 休

山形住 一 友

勢州山田住 吉 度

秋田住 宜 秋 一四四才

敦賀住 正 利

若州高浜住 治 德

越前新保住 高 實

勢州山田住 貞 幸

宜 秋 一四五才

秋田森氏 政 成

大坂有馬氏 一 清

秋田曹早氏 長 德

敦賀住 久 武

秋田住 風 誰

野代住 清 吉

親 葉 一四五才

嫁に姑たはら子に塵か花に鐘
短冊ハ散ぬる花のかたミかな
遠山ハ驚に驚くく落花生哉
咲と散と花にや思ふ句の世界
花を題によむもうたてやちらし書
ちれハ腹たゝぬ日もなし花の沼
雨中の落花といふを
咲ちるや可不可一条乃花の雨
建仁寺浴室乃ほとりにて
浴室に垢を覚樹乃花ちりぬ
桜
宿かりてちる迄ハ見ん桜町
花の紐むすふや羽織さくら色
桜戸や花の火とす瓦灯口
二日草火とす時や東団子
短冊や花桜田の鳥於とし
見渡せハ柳桜や五器乃紋
花のひもむすふや羽織桜色
風の手に飄とさくらや吉野紙
四方の花や士農工商の家桜
家桜かくるハ蛛乃すたれ哉

筑前種成 吟 湖 春 吟 随 吟 家直母 以 昔 秋田柴田氏 光 智 桂 葉 三 保 秋田山形(方)氏 泰 賢 松坂住 三 宣 越前三国住 可 吟 少 蝶 筑前種成 泰 賢 打雨軒 泉 式 奥州南部住 松 葉 泉 式

家桜さす花生や屋形船
ちる時そ心ほう殿家さくら
風呂に葉しとミ立よ家桜
山桜さかりハ花乃峠かな
わら地やれてふか入知や山桜
枕かる陰や邯鄲乃夢見草
漠よりも風呂こはし夢見草
悉皆雪いつれ桜の木末そと
彼岸桜
貞室翁一七日追悼独吟に
万事ハ皆ひかん桜よ一さかり
児 桜付姫桜
筆ゆふや手習さかりちこ桜
花の兄に月弟なりちこ桜
花の下によつゝや三つ乃児桜
ちこ桜花のさかりや美女御前
はやく咲ハおとな恥かしちこ桜
異の卦乃春ハつしめちこ桜
跡先にちる子桜やまゝこたて
顔のしハ乃はすや花見姥桜
山彦の先祖かミねの姥桜

秋田野代住 万 太 秋田真體氏 充 幹 角館住木本氏 師 英 野代金谷氏 政 治 松坂住 三 信 秋田桂 方 秀 秋田根岸氏 桂 葉 秋田野代住 竹 霧 筑前種成 角館安藤氏 似 水 得 友 秋田大たて住 千代一 仙北角館住 秀 将 仙北角館住 定 安 秋田野代清水氏 政 保 仙北信行院 良 信

散比や氣をせき寺の姥桜
姥桜色やわかさの白比丘尼

熊谷桜

熊谷やこれそ弓馬乃家桜

熊谷やなを家つとに花の枝

熊谷の花折人や無道心

熊谷乃花見や天下一の谷

伊勢桜

花ハ根にかへりまうしか伊勢桜

咲ちるや利物のおはりいせ桜

神道の秘事か開かぬいせ桜

神木や下界の地にハ伊勢桜

斎宮乃花のすかたやいせ桜

そさののを見事也けりいせ桜

神変か雨に火とす伊勢桜

普賢象

普賢象にはな毛のはさぬ人もなし

ちる跡や絵の具はけたる普賢象

普賢象桜ハ鼻にあらはれたり

江戸桜

江戸桜なかはら雲に上野哉

大たてノ住

千代一
桂葉

秋田野代住

蝶

一四八ウ

秋田城下

雄

同南

朝

同嘉

耀

秋田野代住

利

角館住

信

吉

江州八幡社氏

有

野代小玉氏

成

大たて小玉氏

滿

秋田城下

朝

仙北湯沢住

光

一四九ウ

秋田野代住

正

内藤左京亮殿度々招き給へと取旁ゆ
へにえまからて

花に吾やわたれとぬれぬ江戸桜

知恩院上野もいかに江戸さくら

江戸桜花の鏡やふしの雪

塩竈桜

塩かまの花のあるしやむつの守

糸桜

糸による物の見事ハ桜かな

風の手に花やもめんの糸桜

花の昼や人も猫の目糸桜

緋桜

火桜やかすみの間にハ袖香炉

火桜のつほミやいはく花炭団

火桜を見けしいひけす人もなし

霧谷

花ハ八重いかて七日をきりか谷

西行桜

かこち顔にちるや西行桜花

なけゝとてちるハ西行桜哉

墨染桜

墨染や黒木つくり乃家桜

季吟

野代住敷村氏

立

勢州中村氏

敷

清

一五〇オ

秋田城下

哉

仙北角館住

成

筑前

信

秋田城下加納氏

嵐

加州金沢住

之

角館住鶴屋

次

秋田野代住

房

仙北横手住

保

三

略

秋田眞壁氏

幹

墨染の花乃かたちや手習子

ひんむけや墨染桜花いくさ

墨染や古硯乃名句花盛

平仲か泪てへなし墨染桜

墨染の花乃盛や筆乃やま

梅へと桜そからす墨染寺

楊貴妃桜付橋桜 米桜 豊井桜 人丸桜

絵にかくも筆かきりある桜哉

楊貴妃やくし気味乃よき花さかり

楊貴妃の病後か花のあから白

見とれてや目もまふはかり渦桜

雲井桜水なき空の波路哉

哥よりもれぬ花へ人丸さくら哉

船着のみなとに咲よ米桜

犬 桜

神前に立やしし狛いぬ桜

草に靈芝木にちん有や犬桜

遅 桜

花さかハ牛に鞍をけ遅桜

呼出しの花の句恥よをそ桜

ともす火にかき立も哉をそ桜

松坂住世太氏 三 俊 一五二オ

秋田牧野氏 重 信

山形住野氏 友 英

野代住 少 蝶

富田氏 正 行

桂 葉

正 立

角龍住 直 下 一五二ウ

秋田堀谷氏 綱 道

角龍安藤氏 貞 利

秋田城下 南 朝

角龍山田氏 重 道

教賀橋爪氏 家直 母

仙北住 昌 長

少 蝶 一五二オ

野代住 直 吉

同 三 耀

越前新保住 高 貫

雨あしもはこひつかれん遅桜

花遅し日やり番匠家桜

遅桜はいひけん仏牛花

八東穂集発句春之下

上 已付蓬餅 鳥合 難遊 沙干

から桃の露やたまりて酒泉邦

幹乃卦を月日の上に節供哉

青柳乃かつらもや日乃三番目

けふといへハ興や咲すか桃の花

盃も下戸を巴もしの流かな

桃の酒よ幸雨に内花見

曲水や氣もうかしぬる小盃

琴詩酒やけふ三日乃友桃のえん

白桃の旗の色めく源氏酒

もちゐるや蓬かもとの間の秋

きねにつるつきてそ藩の蓬餅

桃尻や可といふ酒乃うつはもの

つめや草わらハも餅をつくへき也

餅やみとり花やくれなる桃の妻

松の露やけふ住乃江の汐干瓊

蛤や塩干にミゆる沖乃石

教賀寺田氏 正 次

嘉 慶

桂 葉 一五二ウ

野代小玉氏 重 吉

尾州朝氏 未 醉 子

季 吟

三 信

三 福

季 吟 一五三ウ

大坂有馬氏 一 清

仙北住松井氏 友 治

野代住中井氏 三 耀

秋田城下 拾 言

京 全

同 隣

野代住 重 吉

桂 葉 一五四オ

少 蝶

秋田城下 栄 久

うら梨乃花のころもやひとへ物

梨花一枝雨を帯てや白かのこ

月てなし雪てもなしの花盛

海棠

海棠や花の一期を一ねふり

海棠の花の木たちや旅刀

ちやとくや大海棠のはな袋

椿花

花遅かりけれハ

花にあいて過してよとやいせ椿

花にをく露ハおたまかいせ椿

谷川のせゝら笑ふや玉つはき

花の露ハ水糧輪か玉つはき

咲た石さけ玉ならハたま椿

花そ俳者守武すてにいせ椿

辛夷

なんこよふやにきりこふしの花の露

沈丁花

有御方追善に拈香乃仏事以後誹諧興行に

拈香の言葉に咲や沈丁花

小米花

目につくや臼井峠の小米花

勢州小津氏

三思

宜秋

桂葉

仙北横手住

貞治「五七ウ

秋田城下富田氏

正行

桂葉

会津住平氏

一元貞

新保住

保歩

野代住

通尚「五七ウ

三保

桂葉

野代敷村氏

一昌

沈丁花

桂葉「五八オ

秋田城下

嘉慶

木蓮花

代に一度咲や遊行の木蓮花

春草

それ地獄遠野にあらすや鬼薊

ちく／＼と出す目もとやしをんらし

つまふかよ其妻ならぬ婦ヶ萩

たんほゝや草刈笛に對の物

見る人の氣をほうしけり鼓草

御身拭

仏法をはたかにしてや御身拭

仏くさきゆへにやけふの御身拭

けふそ日も十九出家の御身拭

順峯入

さくら咲遠山ふみや順の峯

花を敷雪に起ふすときんもあり

春月

落花の比只計山下の家にて

花ちりて山の大將や月独

秋田城下曲肱亭のあるし興行に

影を曲て染ミ弓にあり春の月

行灯の影か四方をはるの月

樽ほとな月や霞のあみのうけ

秋田竹内氏

光政

若州高浜住

治徳

仙北湯沢住

友治

秋田城下

桂説「五八ウ

山形住

桂式

秋田比内住

家充

野代住

安之

同

三耀

友静

三保

少蝶「五九オ

季吟

桂葉

三信

三禧

「五九ウ

御祝儀ハ過たり扱も春の夢
 楽助や出替りしらぬ年季者
 さそふ水仕あらハとも待二日哉
 茶事して見るや爾の花盛
 飛梅乃陰にさへつる鳥井哉
 和哥山直政のほりて所望に
 かすむ江や景ハ百首の和かの浦

新刊紹介

稲垣達郎編 森鷗外必携

日本文学必携シリーズの一冊。人と文学、作品論、同時代の鷗外観、森鷗外作品事典、単行本書誌、研究、鷗外文学散歩、年譜という部立てで、人と文学Ⅴではその生涯から近代劇との関連まで、瀬沼茂樹、生松敏三、丸山博、平岡敏夫、関良一、神田孝夫、磯貝英夫、大島田人、古川清彦、越智治雄ら諸氏の論考十編を集めて鷗外の総体を浮き彫りにし、八作品論Ⅴでは「舞姫」から「澀江抽斎」まで久保田芳太郎、稲垣達郎、清水茂、竹盛天雄、尾形働、重

季 吟 三月 尽
 任 風 吟
 野代住 一
 野代住 直 吉
 一入子女 長 女
 季 吟
 「六ニウ」

行春よなふく御宿まいらせふ
 樽そことなれるや霞末の春
 たつた今春ハつきけり後夜の鐘
 とも綱に針させ春のみなと船
 鳥ハ雲に作者ハ集に入にけり

秋田森氏 成
 同渡辺氏 久 治
 京 三 保
 桂 貞 恕
 葉 六三ウ空白

松泰雄、淡川曉ら七氏の論を収めている。いずれもすでに鷗外研究では定評のある執筆陣によるすぐれた気鋭の論究で、総合的な鷗外研究文献として、今日望み得る最も質の高いものになっている。つとに鷗外研究の第一人者として名のある編者の、行き届いた、しかもきびしい眼配りは、論の選択や書誌などに明らかで、五十数編におよぶ八同時代の鷗外観Ⅴなどとともに、たいへん有益で便利な一書を編みあげている。

「あらたに鷗外に立ち向かおうとする場合の有力な指針であらうとしたことはもちろん、長い研究閥歴をもつ向きにも重宝がられるよう配慮した」と編者はいうが、文字通り、鷗外研究のための必携書がここに誕

生したわけである。
 (昭和四十三年二月 学燈社 七〇〇円)